〒398-0002　長野県大町市大町 8056-1
TEL. 0261-22-0211 FAX. 0261-21-2133
✉ E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:https://www.omachi-sanpaku.com
市立大町山岳博物館公式 Web サイトは、大町山岳博物館友の会の支援により博物館が運用しています。

OMACHI ALPINE MUSEUM
市立 大町山岳博物館

山と博物館

「山と博物館」は自治会などを通じ全戸配布されるほか、市役所および関連施設で配置配布しています。また博物館公式 Web からもご覧いただけます。

2023
冬号
第 68 巻 4 号

無料
Free

表紙の1枚 ……1
・上條嘉門次関連の資料が博物館に寄贈されました
さんぱく研究最前線 ……2・3
・大町市における昆虫の動態について
研究ノート ……4
・チシマギキョウとイワギキョウの花粉の色の違いと果実の向き
山博コレクション ……5
・岩塩標本
付属園だより ……6
・付属園にタヌキがやってきました！
博物館のひろば ……7
山博友の会だより ……8
展示・イベントのご案内 ……8

上條嘉門次関連の資料が博物館に寄贈されました

贈呈式の様子（写真右：上條 久枝氏　左：牛越 徹大町市長）

清水　隆寿

９月30日、上高地の嘉門次小屋の四代目女将上條久枝さんを大町山岳博物館にお迎えし、上條嘉門次が使用した猟銃やピッケル等の嘉門次関連資料一式の贈呈式が行われました。

ご寄贈していただいた資料は、著書『日本アルプスの登山と探検』（1896年発行）を通じ、日本アルプスとともに日本の自然の魅力を世界に紹介した英国人宣教師ウォルターウェストン（文久元（1861）年～昭和15（1940）年）を数度にわたり登山案内した猟師・上條嘉門次（弘化４（1847）年～大正６（1917）年）にまつわるものです。彼が用いた村田銃とウェストンが帰国する際に嘉門次に贈ったとされるピッケル（日本製）、その他嘉門次が山で使用したと伝わる山刀や熊槍（刃部のみ）、猟銃に付属する火薬入れなどの狩猟用具や煙草キセルなど翁ゆかりの品々合計８点です。これらは、明治から大正時代の近代登山の黎明期を伝える日本近代登山の歴史に足跡を残した重要な資料として「日本の近代登山の幕開け」のコーナーにおいて常設展示されています。

上條さんによりますと、猟銃とピッケルは長年にわたり嘉門次小屋の囲炉裏の間に飾られていたものです。ウェストンと嘉門次の親交を語るこれら資料の散逸や資料の劣化を防ぐとともに、より多くの方々に実物の資料をご覧いただきたいとの思いで山岳博物館にご寄贈いただきました。

山岳博物館には同時期に猟師として活躍した遠山品右衛門や小林喜作などの資料があり、上條嘉門次の資料が加わることで、往時の北アルプスにおける狩猟文化の実態解明につながるよう研究を進めるとともに、多くの方に博物館へご来館いただき実物の資料をご覧いただき、二人の絆を感じていただけましたら幸いです。

（大町市文化財センター　学芸員）

◆市立大町山岳博物館は、月曜日と祝日の翌日が休館です。ただし、月曜日が祝日の場合は開館し、翌日休館となります。
◆**12月～3月の開館時間は午前10時～午後4時**（入館は午後3時30分まで）に変更になっています。お間違いないようご注意ください。
◆毎月第３日曜日の「家庭の日」とその前日の土曜日は、**「大町市民無料開放デー（長野県民割引）」**として、大町市民の方は観覧料が無料です。また、この日は長野県民の方も団体割引料金で観覧いただけます。今季の該当日は１月20日・21日、2月17日・18日、3月16日・17日です。この機会にぜひご来館ください。
◆次の方は通年、いつでも博物館を無料で観覧いただけます。**《障がい者手帳をお持ちの方と付き添いの方１名／未就学児／大町市内小・中学校に通う児童・生徒／大町市内在住の65才以上の方と高校生》**
このほかにも観覧料の各種割引があります。詳しくは受付窓口でお尋ねください。

博物館施設案内はこちら

大町市における昆虫の動態について

清水 博文

博物館では、現在、大町市平・大町・社・常盤・美麻・八坂の６地区で昆虫の生息状況調査を進めています。それによって、昔は見ることができた昆虫が、今では見ることができなくなってしまった種。また、昔はいなかったが、最近になって見かけるようになった種などを確認しています。ここでは、チョウを中心に調査結果と過去の文献などに記録されている種とを比較して紹介いたします。

減少または近年見ることができなかった種

近年、大町市で見ることができなくなってしまった昆虫の多くは、明るい草原や田畑の周りに生息していた種です。人家周辺の草地の手入れがされなくなり、林になってしまったり、手入れがされず日が差し込まない暗い林になってしまったりしたため、減少している場合が多いです。

オオルリシジミ（常盤地区にいたが1950年以降確認されていない。写真は安曇野市）

ゴマシジミ（常盤地区にいたが 1952 年以降確認されていない。写真は松本市）

ヒメヒカゲ（常盤地区にいたが1951年以降確認されていない。写真は岡谷市で撮影）

チャマダラセセリ（常盤地区にいたが1975年以降確認されていない。写真は木曽町）

増えている種

外国から日本に入ってきて、日本の生息環境が適していたため繁殖した種や、国内に天敵がいないため、分布が広がっている種、もともとは日本の南方に生息していたが、地球温暖化の影響を受けて増えている種などがあげられます。

ヨコヅナサシガメ（大町地区2023.6.6　人の手により移入された種。近年、市内各地に広がっている。）

ツマグロヒョウモン（常盤地区　2023.10.7　温暖化により、今まで寒くて棲めなかった地域に棲むことが出来るようになった種のひとつ。現在、市内全域で見ることができる。）

キボシカミキリ（八坂地区2023.7.4　クワやイチジクの枝によくつく。以前は、黒地に白い小さな斑紋がたくさんあるゴマダラカミキリが多かったが、近年はキボシカミキリの方がよく見かける。）

ウラナミシジミ（美麻地区　2023.9.7　毎年、大町より暖かい場所から飛んできて、秋に多く見かけるが、越冬することはできない。）

低地から高山へ生息域を広げている種

夏の間、平地に生息しているチョウやトンボなどの昆虫類が、高山帯で確認されることが時々あります。低地に生息しているモンキチョウが高山帯で観察されるのもその一例です。

モンキチョウのオス（左）が、右にいる**ミヤマモンキチョウ**のメスの近くで停止飛行（交尾前行動）を行い交尾を促している（東御市　2023.7.10）。

上の写真と同じ個体　**モンキチョウ**のオス（左）が**ミヤマモンキチョウ**のメス（右）に交尾をしようとしている。

上２枚の写真は、モンキチョウのオスが高山蝶のミヤマモンキチョウのメスに交尾をしようとしているところで、撮影場所は東御市です。この地域では、すでに、モンキチョウとミヤマモンキチョウが交尾をしている観察例も報告されています。

本来、違う種どうしでは、体のつくりが異なり交尾ができず雑種が生まれることはありませんが、自然界でもまれに交尾ができて、雑種が生まれてしまうこともあります。たとえ交尾できても、卵が孵化しない、孵化しても幼虫が育たないなど、本来の種の子孫を次世代に残すことができなくなることがあります。

ミヤマモンキチョウの生息している北アルプスの稜線でも、モンキチョウを見かけます。温暖化で、高山にすむチョウの生息域が狭まってしまったところに、近縁種との交雑が増えると、将来どうなってしまうのか懸念されます。

（市立大町山岳博物館　副館長）

研究ノート

チシマギキョウ *Campanula chamissonis* とイワギキョウ *C. lasiocarpa* の花粉の色の違いと果実の向き

千葉　悟志

チシマギキョウ、イワギキョウは、ともに高山の砂礫地に生える多年草です。花の時期もいっしょで、花を含む形態もよく似ていますが、図鑑等では「花冠の内面や裂片に長い軟毛が生えているのがチシマギキョウ（a）、生えていないのがイワギキョウ（b）」とされています。

上段：チシマギキョウ	花（a）	蒴果（c）	蒴果（e：蓮華岳）	花粉（g）
下段：イワギキョウ	花（b）	蒴果（d）	蒴果（f：白山）	花粉（h）

白馬岳で稜線は横殴りの雨粒がたたきつける2023年９月27日、調査地に向かう間、下を向いて歩いていると、チシマギキョウの蒴果は下向き（c）、イワギキョウの蒴果は上向き（d）になっていることに気づきました。この違いは正解なのかはまだわかりませんが、ほかの山域でも観察をして、明らかにできたらと思います（参考：eとf）。

また、企画展「北アルプス誕生とそこに息づく高山植物のものがたり－花、果実、種子、芽生え、ときどきふしぎ発見！－」（令和３年度開催）に向け、チシマギキョウとイワギキョウの花のなかを撮影した画像を見比べていたところ、チシマギキョウの花粉の色は黄白色（g）、イワギキョウの花粉は薄い紫色（h）という違いがあることがわかりました。

これは図鑑等にはない内容なので、ちょっとした発見といえるかもしれません。

（市立大町山岳博物館　学芸員）

山博コレクション

岩塩標本

竹村　健一

山岳博物館には地質関係の標本（岩石・鉱物・鉱石・化石）が約3,000点収蔵されています。これ以外にも北アルプス地域を中心とした未整理の標本もあります。その中で、今回は「岩塩」について紹介します。

岩塩は太古の昔地殻変動により海水が陸上に閉じ込められたのち塩分が岩石化（結晶化）したものです。成分のほとんどは、食塩NaClです。マンガンやカリウム、鉄などを少量含むとピンク色や黄色、黒色を帯びます。アメリカやヨーロッパ、アフリカなど世界各地で採掘されていますが、日本では発見されていません。年代の古いものでは数億年前のものもあります。採掘された岩塩は、商品化されて“ヒマラヤの岩塩”などとして販売されています。

さて、当館に収蔵されている岩塩は14点です。以前は、「塩の道博物館（現塩の道ちょうじや）」で展示されていたものですが、2013年の閉館に伴い、当館に寄贈されたものです。産地はアメリカ、メキシコ、イギリス、スペイン、イタリア、ドイツ、ポーランド、オーストラリア、ニジェール、マリです。１点を除き、産地の国名以外の詳しい記録は残っていませんが、数kg～数百kgのものまであり、色も白、ピンク、黄灰、茶、黒などさまざまあり、貴重な標本です。しかしながら、水分を吸着して潮解してしまったり、表面から結晶が剥がれ落ちたりして、徐々に小さくなっているようです。実際にサイズを測ってみると記録されている数値に比べて３割程度小さくなっていました。旧塩の道博物館では、“蔵”で展示されていたそうです。この蔵は江戸時代には運ばれてきた塩を一時的に保存するための“塩蔵”として使われていたそうです。当時も“にがり”成分が溶け出すためそれを受けるお釜が必要でした。蔵とお釜は現在の「塩の道ちょうじや」で見学できます。

下の写真は、本館収蔵品中最大サイズの岩塩です。

記録では「縦65cm・横110cm・奥行60cm・700kg　イギリス産」とあります。全体の色は茶色で灰色～灰褐色の縞模様が見られます。大変重く大きいため車輪付きの台車に載せたままの状態で収蔵庫の階段下で眠って（保管されて）います。

次の写真は、アメリカ産の岩塩です。

唯一、鉱山と生成年代が推測できる記録がある標本です。表示は一部欠損がありますが、「アメリカ ニューヨーク州 ランジング産・シルリアン紀・塩化ナトリウムの純度98.262%」とあります。実際に計測してみると、縦20cm・横40cm・奥行25cm・重さ22.7kgでした。黒光りして重厚感があります。溶け出したことがありビニール袋に密閉した状態で保管しています。そのため袋のまま撮影しました。「シルリアン紀」とは古生代シルル紀のことです。魚類やウミサソリなどが泳いでいた約４億年前の海を想像しながら眺めています。

（市立大町山岳博物館　専門員）

付属園だより　付属園にタヌキがやってきました！

今年８月、ふくしま海洋科学館（アクアマリンふくしま）から、ホンドタヌキの「おしお」がやってきました。「おしお」は付属園に来てから決まった名前です。出身のふくしま海洋科学館のテーマである「潮目」から名付けました。おしおはとっても好奇心旺盛で、ちょっぴり臆病な性格。付属園に来てすぐの頃は、人の姿が見えると大慌てで展示場の奥へ隠れていましたが、最近は飼育員の手から餌を食べたり、足元まで近づいてきて長靴の匂いを嗅いでみたりと慣れた様子を見せてくれるようになりました。

展示場の様子を窺うおしお（冬毛）

おしおの好きな食べ物はお肉。ホンドタヌキは肉食性の強い雑食性の動物で、野生では木の実や昆虫、小動物などを食べています。付属園では、人参・サツマイモといった野菜やリンゴ・ドッグフードのほかに、馬肉などのお肉を与えていますが、お肉への食いつきは特に良く、手渡すとあっという間に食べてしまいます。

おしおのプロフィール

- 出生日：2020年6月11日
  ふくしま海洋科学館生まれ
  （オス　３才）
- 父：いのこづ　母：よしの
- 好きな食べ物：お肉

夏毛のおしお

そんなおしおは現在トレーニング中。餌や合図を出す道具（クリッカー）を用いて、体重測定や健康診断などがスムーズに行えるよう練習しています。このようなトレーニングを「ハズバンダリー・トレーニング」と呼びます。付属園にお越しの際には、トレーニングに励むおしおの姿が見られるかもしれません。ぜひ温かく見守ってあげてください。

冬が近づき、付属園の動物達も冬毛や冬羽へと変化してきています。おしおも冬毛が生えて、丸々とした見た目になってきました。夏毛の姿と比べて毛の量と密度が増し、体も一回り大きくなったように見えます。スマートな夏毛姿も素敵ですが、丸々した冬毛姿も魅力的です。

野外でタヌキと出会うには

日本では馴染み深い動物のタヌキですが、夜行性のため日中その姿を見かける機会はあまり多くありません。そんな時には、足跡や糞・食痕といった生き物の痕跡「フィールドサイン」が、タヌキがどこでどんな暮らしをしているのかを知る手掛かりになります。日本では本州・四国・九州にかけて分布するホンドタヌキと、北海道に分布するエゾタヌキの２種が生息しています。身近なところにもタヌキが生息している痕跡が見つかるかもしれません。

タヌキのフィールドサイン

- **ためフン**
  タヌキは複数個体が同じ場所に糞をする、ためフンの習性があります。

- **足跡**
  同じイヌ科のイヌやキツネに似ますが、タヌキは第３趾（ヒトでいう中指）が長いのが特徴的です。

博物館のひろば

ライチョウの生息環境の現地視察

令和5年9月9日（土）

ライチョウの飼育環境の向上に活かすために、立山室堂においてライチョウの生息環境の視察を行いました。初めて野生のライチョウを観察した飼育員もおり、野生のライチョウの生活を垣間見ることができました。採餌や警戒の様子、人を恐れない様子などを間近で観察することができ、貴重な経験となりました。また、植生といった生息環境も観察することができました。本視察で得られた経験を、ライチョウのよりよい飼育環境づくりに活かしてまいります。

大町自然探検隊 水辺の生き物を観察しよう

令和5年9月18日（月・祝）

大町自然探検隊として、木崎湖内に入って水辺にすむ生き物たちを観察するイベントを開催しました。当日は天候が心配でしたが開始直前に雨が上がり、カラスガイ、オオタニシ、ヨシノボリ、ヤゴ、ヌカエビなど様々な生き物を観察することができました。木崎湖には珍しい貝が生息していますが、その数は減ってきていると考えられています。今回のイベントで木崎湖の生き物を知るとともに、外来種の侵入や工事などが在来種に及ぼす影響などについても考えていただけていたら嬉しく思います。

職場体験学習受入れ

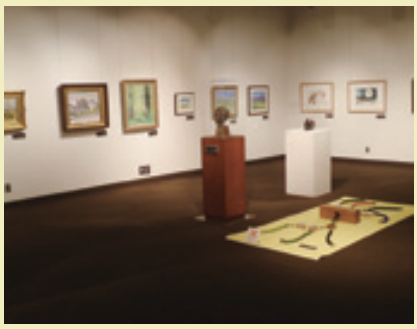
令和5年10月3（火）～4（水）、18（水）～19日（木）

山岳博物館では、市内や近隣の中学校また高校の職業体験学習を受け入れています。

今年度からは、新たに学芸員などが日常行っている業務を体験いただけるプログラムをご用意いたしました。3～4日は、長野県白馬高等学校（2名）、18～19日は大町市立大町中学校（2名）の生徒にご来館いただき、1日目は展示室やバックヤードを見学した後、植物の標本づくりを行い、2日目は動物飼育、受付、昆虫の標本整理などを体験していただきました。

特別展「出張安曇野アートライン展 in 山岳博物館」～水・木・土・空～

令和5年10月7日（金）～22日（日）



本特別展では、北アルプス国際芸術祭2024連携企画として、北アルプス国際芸術祭2024のコンセプトである、「水」・「木」・「土」・「空」をテーマとした安曇野アートライン加盟館の所蔵する選りすぐりの作品を展示しました。アンケートの集計結果、安曇野アートラインという名前は聞いたことがあるがよく知らなかったという方が多くいました。本特別展により安曇野に点在する博物館・美術館の魅力を知っていただくきっかけづくりができたのではないかと思います。

大町自然探検隊「河原の石ころをさがそう」

令和5年10月22日（日）

篭川下流の河原で、石ころをひろいながら、北アルプスの成り立ちを考える親子地学教室を行いました。親子6組18名の方に参加いただき、講師から説明のあった8種類の石を中心に石を拾い集めました。秋晴れのすがすがしい天候にも恵まれ、絶好の石ひろい日和となりました。時間を忘れて、遠くまで石拾いに夢中になるご家族もありました。最後には、雪化粧の爺ヶ岳をバックに記念撮影をして解散となりました。終了後、大町エネルギー博物館も見学させていただき、充実したイベントになったようです。

企画展「大町と絶滅動物」のミュージアムガイドの開催

令和5年11月3日（金・祝）

絶滅動物を扱う本企画展では、ニホンオオカミの頭骨、ニホンカワウソの剥製、トキの剥製などの国内でも貴重な資料を展示しています。また、この地域で姿が見られなくなった動物や、絶滅が危惧される動物の展示・解説もございます。ガイドでは、近代以降にこれらの動物が姿を消していった当時の国内情勢などの背景や、その動物たちの生態などについて、展示資料を深堀しながら学芸員が解説を行いました。

山博（さんぱく）友の会だより

当会またサークル４団体（ボランティアの会・烏帽子の会・花めぐり紀行・山岳文化研究会）の活動は、博物館公式HPでご覧いただけます。

すでに「山と博物館（秋号）」でご案内の通り、博物館との共催で、友の会創立45周年記念として、大町市出身の「山岳ユーティリティ」三戸呂拓也さんの講演会と鷹狩山トレッキングを行いました。参加された方からは「今までいろいろな講演会を聞いたが、今回が一番良かった」「一番感動した講演会だった」など、同じようなお話を大勢の方からうかがいました。鷹狩登山でのお話も、技術的なことはもとより、故郷の自然や山への愛情が深く感じられるものでした。皆さんも改めてこの地のすばらしさを再確認していただけたらと思います。友の会では、講演会のサポートの他、登山の昼食の「山食」づくりを行いました。登山隊にはアルファ米を水戻しで持っていただき、山の子村で豚汁などの提供を行いました。私たちも「皆さんに支えられた自己満足」だとしても、大成功だった記念イベントだったと思います。45周年に合わせたわけではないですが、今年度より会費の大幅値下げをしました。この機会に、ぜひ多くの方にご入会いただければ幸いです。

展示・イベントのご案内

企画展「大町と絶滅動物」

ミュージアムガイド

担当学芸員が展示の概要などを解説します。

■期日　2024年1月7日（日）
■時間　10時30分～
　　14時30分～
　　（各回20分程度）
■会場　当館　特別展示室
■対象　どなたでも
■費用　無料（ただし、通常の入館料が必要となります）

大町自然探検隊 バードウォッチング in 仁科三湖

■期日　2024年1月20日（土）
■時間　9時～11時
■会場　仁科三湖（集合：平公民館）
■対象　どなたでも
■費用　無料
■申込み　事前に当館へ
※持ち物等詳細につきましては、博物館HPをご確認ください。

常設展「山と美術」

■期日　2024年2月1日（木）
　　～3月31日（日）
■時間　10時～16時
　　（入館は午後3時30分まで）
■会場　当館　特別展示室
■費用　通常の入館料（常設展と共通）が必要です

常設展「山と美術」ミュージアムガイド中止のお知らせ

2月18日（日）、3月17日（日）に予定しておりましたミュージアムガイドは担当職員の異動により中止いたします。ご迷惑をおかけする事となり誠に申し訳ございません。

山のサイエンスカフェ inさんぱく2024

■期日　2024年3月3日（日）・10日（日）
■時間　13時30分～16時
■場所　両日とも当館講堂
■対象　大人（各回定員30名）
■費用　無料
■申込み　事前に当館へ

人事異動のお知らせ

令和5年10月1日付で、当館職員に次の異動等がありました。

《転出》　清水　隆寿（副館長）
　※教育委員会生涯学習課文化財係（文化財センター）へ転出
《新任》　保科　和弘（事務吏員）

編集・発行
市立大町山岳博物館 OMACHI ALPINE MUSEUM
―創立1951年―
〒398-0002　長野県大町市大町8056-1
市立大町山岳博物館　編集責任者　鈴木啓助
TEL. 0261-22-0211　FAX. 0261-21-2133
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:https://www.omachi-sanpaku.com
2023 冬号
第68巻4号
発行日　2023（令和5）年12月20日
印　刷　有限会社北辰印刷
〒398-0002長野県大町市大町3871-1
TEL.0261-22-3030　FAX.0261-23-2010